

# 経政

世阿弥作

ワキ  
シテ

僧都行慶

平経政

地は  
季は

京都

秋

「是は仁和寺御室に仕へ申す。僧都行慶にて候。扱も平家の一門但馬の守経政は。いまだ童形の時より。君御寵愛なのめならず候。然るに今度西海の合戦に討たれ給ひて候。又青山と申す御琵琶は。経政存生の時より預け下れて候。彼御琵琶を仏前にすゑ置き。管絃講にて弔ひ申せとの御事にて候ふ程に。役者を集め候。

「実にや一樹の陰に宿り。一河の流れを汲む事も。皆これ他生の縁ぞかし。ましてや多年の御値遇。恵を深くかけまくも。忝なくも宮中にて。法事をなして夜もすがら。平の経政成等正覚と。弔ひ給ふ有難さよ。

「ことに又。彼青山と云ふ琵琶を。く。亡者の為めに手向けつゝ。同じく糸竹の。声も仏事をなし添へて。日々夜々の法の門。貴賤の道も普しや。く。

シテサシ

「風枯木を吹けば晴天の雨。月平沙を照らせば夏の夜の。霜の起居も安からで。仮に見えつる草の陰。露の身ながら消え残る。妄執の縁こそつたなけれ。不思議やな早深更になるまゝに。夜の灯かすかなる。光の内に人影の。有るか無きかに見え給ふは。如何なる人にてましますぞ。

ワキ

「不思議やな早深更になるまゝに。夜の灯かすかな

る。光の内に人影の。有るか無きかに見え給ふは。

如何なる人にてましますぞ。

シテ詞

「我経政が幽霊なるが。御弔ひの有難さに。是まで頭はれ来りたり。

ワキ

「そも経政の幽霊と。答ふる方を見んとすれば。又

消えくくと形もなくて。

シテ「声はかすかに絶え残つて。

ワキ「正しく見えつる人影の。

シテ「有るかと思れば。

ワキ「又見えもせで。

シテ「有るか。

ワキ「無きかに。

シテ「かげろふの。

地「幻の。常なき身とて経政の。く。もとの浮世に  
帰り来て。それとは名のれども其主の。形は見え  
ぬ妄執の。生をこそ隔つれども。我は人を見る物  
を。実にや呉竹の。笥の水はかはるとも。住み飽  
かざりし宮の中。幻に参りたり。夢幻に参りたり。

ワキ詞「不思議やな経政の幽霊かたちは消え声は残つて。  
なほも言葉をかはしけるぞや。よし夢なりとも現

なりとも。法事の功力成就して。亡者に言葉をか  
はす事よ。あら不思議の事やな。

シテ詞「我若年の昔より宮の中に参り。世上に面をさらす  
事も。偏に君の御恩徳なり。中にも手向け下さ  
る。青山の御琵琶。娑婆にての御許されを蒙り。  
常に手馴れし四つの緒に。

地「今も引かる。心故。聞きしに似たる撥音の。是ぞ  
正しく。妙音の誓ひなるべし。されば彼経政は。

く。いまだ若年の昔より。外には仁義礼智信の。五常を守りつゝ。内には又花鳥風月。詩歌管絃を専とし。春秋を松陰の。草の露水のあはれ世の。心にもるゝ花もなし。く。

ワキ詞  
「亡者の為めには何よりも。娑婆にて手馴れし青山の琵琶。おのくゝ樂器を調へて。糸竹の手向をすゝむれば。

シテ詞  
「亡者も立ちより灯の影に。人には見えぬ者ながら。手向の琵琶を調ふれば。

ワキ  
「時しも頃は夜半樂。眠りを覚ますをりふしに。

シテ  
「不思議や晴れたる空かき曇り。俄に降りくる雨の音。

ワキ  
「しきりに草木を払ひつゝ。時の調子も如何ならん。  
シテ  
「いや雨にてはなかりけり。あれ御覽ぜよ雲の端の。

地  
「月に双の岡の松の。葉風は吹き落ちて。村雨の如くにおとづれたり。おもしろや折からなりけり。

大絃は嘈々として村雨の如し。さて小絃は切々と  
して。私語に異ならず。

クセ「第一第二の絃は。索々として秋の風。松を払つて  
疎韻落つ。第三第四の絃は。冷々として夜の鶴の。  
子を思つて籠の内に鳴く。鶏も心して。夜遊の別  
れとゞめよ。

シテ「一声の鳳管は。

シテ地「秋秦嶺の雲を動かせば。鳳凰も是にめでゝ。桐竹

に飛び下りて。翅を連ねて舞遊べば。律呂の声々  
に。心声に発す。声あやをなす事も。昔を返す  
舞の袖。衣笠山も近かりき。おもしろの夜遊や。  
あらおもしろの夜遊や。あらなごり惜しの夜遊や  
な。

シテ詞「あら恨めしやたま〜閻浮の夜遊に帰り。心をの  
ぶるをりふしに。又瞋恚の起る恨めしや。

ワキ「さきに見えつる人影の。なほ顯はるゝは経政か。

シテ「あら恥かしや我姿。はや人々に見えけるぞや。あの灯を消し給へとよ。

地「灯を背けては。く。共にあはれむ深夜の月をも。

手に取るや帝釈修羅の。戦ひは火を散らして。瞋恚の猛火は雨となつて。身にかゝれば。払ふ剣は他を悩まし。我と身を切る。紅波はかへつて猛火となれば。身を焼く苦患はづかしや。人には見えぬ物を。あの灯を消さんとて。其身は愚人夏の虫

の。火を消さんと飛び入りて。嵐と共に灯を吹き消して。暗まぎれより。魄霊は失せにけり。魄霊の影は失せにけり。